

# 現代文化学科開設時の思い出

## 1、時代をリードしてきた立教大学社会学部

社会学の成立は、哲学や経済学と比べて新しい学問である。哲学ならそれこそ古代にまでさかのぼることができるし、現在の経済学の基礎ともなったアダム・スミスの『国富論』は、1776年の出版であった。経済学の歴史をひもといてみても、ゆうに200数十年の年月が経過している。それに比べて社会学は、19世紀も後半の学問であり、1世紀そこそこの歴史しかない。

理由は、社会学は人間の行為に関する科学であり、成立するためには、人々の行為が多様化し、行為の選択肢が増えることが大きくかかっている。その意味で社会学成立の前提には、社会の成熟が不可欠である。社会が成熟することにより、人々の行為や選択の幅が広がり、人と人の関係も多様化し、かつ複雑化する。

社会学の成立にこのような前提条件が必須である限り、歴史的に最初に社会学の成立したのがヨーロッパだったのも当然である。産業革命に成功し、封建社会から近代資本主義社会へと船出していったのは、イギリスを中心としたヨーロッパだったからである。

しかしヨーロッパは、二度の世界大戦の惨禍に見舞われ、多くの知識人が海外に移住した。そのため戦後、豊かさを象徴し、社会学をリードすることになったのはアメリカである。移民の国アメリカは、以前から人の移動が盛んであり、かれらの居住する都市研究ではシカゴ学派と呼ばれる一群の思想家が活躍するまでになっていた。その動きは、戦後さらなる移民や亡命知識人などを受け入れることにより、1950～60年代の社会学の黄金時代へと通じていく。

一方、日本に目を転じてみると、立教大学が新制大学として出発し、文学部のなかに社会科という名の社会学科が設けられたのは1949年であった。同じ文学部のなかには、基督教学科、英文学科、史学科、心理教育学科があった。戦後、文学部は、5学科体制として始まったのである。

社会を冠する学科が、文学部のなかにはとはいえ出来たのは日本でかなり早い。東京大学ですら社会学が本来的な意味での科名として登場するのは、1946年3月からであり、それも哲学科のなかの21ある専修科の1つとしてであった。東京大学で社会学が学科になるのは、49年のことである。これは立教大学が、いかに時代の動きに敏感であったかを物語る。

その後の立教大学社会学科の動きは目覚ましい。1958年には文学部から独立し、学部昇格している。法学部の創設は1959年であるから、社会学部は法学部よりも古い歴史をもつ。このとき同時に産業関係研究所も併置された。

産業関係は、今日でこそ少々手垢に染まった語と化しているが、当時は時代の先端を表す象徴的な響きをおびていた。社会の成熟には産業の発展を前提とするが、産業の進展は、企業のみならずさまざまな組織を複雑化し、人々の行為や欲求をも肥大化させる。仕事のやる気や生きがい、不安、孤独も産業や人と人との関係に大きく左右される時代となった。

戦後のアメリカは、イギリスに代わってその広大な大陸と多くの移民の活力を背景に希望の大陸にのし上がっていったが、その背後で急速な産業発展による負の部分もあらわになり始めていた。戦前からの作業能率に関するホーソン工場の実験をはじめ、産業関係は、社会を一層発展させるための方策と同時に負の側面も解決するものとして大きな期待を集めることになる。

立教大学での社会学部や産業関係研究所の設置は、世界の先端を走るアメリカの動きにほとんど相即しており、特に産業関係研究所の設置には、アメリカに留学した教員が、将来は日本においても最重要課題になることを見抜いて、働きかけたのではないかと推測している。

産業関係研究所は、その後1964年に社会学部が二学科体制になるとき、産業関係学科として独立し、社会学科と肩を並べることになる。研究所より、産業関係を学として独立させ、専門的な体系を教授し、有為な人材を育て社会に送り出すことが、時代の要請にこたえる道と思われたのだろう。

社会学部の時代との交信は、これにとどまらない。3年後の1967年に今度は、観光学科が開設され、同時に観光研究所並びに社会福祉研究所も設置された。

社会の成熟は、人々にゆとりをもたらし、旅や外食産業、人々とのコミュニケーションの重要性を一層不可欠なものにすると同時に、労働（産業関係学科）と余暇（観光学科）は、まさに切り離すことのできない成熟社会の両面となった。

と同時に、成熟社会は少子高齢化をもたらす。子どもの減少は、それだけでも社会の維持を困難にするし、他面、定年後をいかに充実させて生きるかは、人間にとって大きな課題である。社会福祉研究所は、まさに当時としては半世紀後の今日の状況を見据えて設置されたものである。

果せるかな観光学も社会福祉学も、時代の要請はますます大きくなるばかりで、この分野を体系的に研究しつつ専門家を育成し、若き学徒を社会に送り出すことは大学の重要な使命となる。1998年、観光学部、コミュニティ福祉学部が、学部として新座キャンパスに開設される。社会学部に現代文化学科が創設されたのは、観光学科独立後、それに代わる第3の鼎を担う学科としてである。

## 2、現代文化学科開設時の思い出

20世紀後半に東欧圏やソ連邦が相次いで崩壊し、戦後長らく続いた世界の冷戦構造が解体した。当初は誰もが、地球の一体化を想った。しかしことはそう単純ではなかった。20世紀の経済体制の違いによる対立に代わり、世界は宗教や文化を異にした対立の時代に突入したのである。いわゆる「文明の衝突」と呼ばれる時代の到来である。

社会学部は、この新世紀の地球規模で進行した新しい変化にも見事に対応した。グローバル化の波の下で、各国とも人々の移動はますます盛んになるだろう。そうなれば1つの国家のなかに、多数の宗教や文化を異にしたエスニック集団が存在するようになる。またそのような人々の集まる都市も、次第に特定国の都市ではなく、世界都市化していく。

産業の成熟化の下で進行する人の移動のグローバル化、これまでの同一民族が居住する傾向の強い都市から、多様な宗教・文化の織り成す世界都市化、技術革新に基づく大量生産・大量消費、人々の欲望が発散する下での環境の悪化は、1つの国家の枠を超え世界的な課題になりつつあった。現代文化学科は、まさにこうした課題にこたえるために設置されたのである。

2002年の現代文化学科最初の一般入試は、推薦等をのぞく実質定員80人のところに、1800人以上の志願者が殺到した。単純倍率だと20倍以上になるが、できたばかりの学科のため歩留まりの予測が難しく、余裕をもって合格者を出したので実質倍率はやや緩和された。しかし結果は、歩留まりもよく大幅な定員超過となった。これはそれだけ、世間でも待ち望まれていた学科の誕生といえる。

このような高い倍率を超えて、入学してきた学生と一緒に社会学部全体の入学式を迎えたのは、同年4月5日である。学科ごとのオリエンテーションは、全体ガイダンスの翌日で、今にして思えば会場は、8

号館 8202 教室であった。

男女比は、3.5 対 6.5 がおおよそのところだったろうか。現代文化学科第 1 期生の誕生である。教員は、定員 10 名のところに、当初赴任してきたのは 9 名であり、オリエンテーションで学生との実質的な顔合わせも兼ねることになった。どの学生も、新設学科 1 期生としての自信と気力に満ちあふれているように思えたが、学生から教員はどのようにみえたただろうか。

現代文化学科は、設置の趣旨にも記していたように、ゼミを重視し、少人数教育を目指していた。しかし予想を超える志願者や高歩留まりにより、定員をはるかに超える新入生の誕生は、結果として必修科目などがかなりの大人数授業となった。また、重視していたゼミは、半期ものとして、後期に開講することにした。文化は、大変間口が広いので、高校卒業後すぐに特定のゼミに入るより、大学に慣れたところで、選んでもらうことにしたのである。

しかも、1 年次のゼミは、将来 2 年次以降、どのゼミに入ってもまごつかないように基礎を重視することにし、各教員に専門領域から重要な文献を挙げてもらい、やり方は教員の自由にしつつも、基礎的知識に目配りするよう組み立てられた。

大学で個々の学生を知る機会は、専門ゼミである。そのゼミが、後期に置かれることになったため、1 年次の必修授業をもたない教員は、前期は全学カリキュラム等を担当することになった。このことは、立教大学をあまり知らない他大から来た教員には、大学全体の雰囲気や他学部の学生を知る上で大変よい機会になった。

後期になり、学科専門のゼミが始まり、ようやく現代文化学科の学生と身近に接することになった。このとき驚いたのは、現代文化学科の学生の多くが、自宅通学であり、いわゆる地方出身者が大変少ないことであった。9 割以上が自宅通学者であり、1 人暮らしは、ほんのわずかであった。

これは立教大学の大きな特色かもしれない。立教大学は、都市型の大学なのである。これを知ったことが、私などにはその後のゼミ運営にもいかされることになった。

現代文化学科が設置の当初から重視したのは、3 年次のフィールドワークである。エスニシティにしろ消費や都市、環境にしても、教室で学べることには限界がある。豊かな現実の多様性を無視して、理論が独り歩きし、プロクルステスの寝床と化さないようにするためにも常に現実とのフィードバックが求められる。

学生の多くが東京ないしはその近辺の出身者ということは、日本という社会の現実を東京の延長上で考えているかもしれない。3 年生のゼミで外国人の多い愛知県豊田市や静岡県浜松市、さらに日本の先住民の住む北海道を私が選んだのは、ゼミの課題にもよるがこうしたことも関係している。

現代文化学科が実際に動き出して半年、後期に最も力を入れたのは、同年 11 月 30 日にもたれた現代文化学科新設記念シンポジウムである。テーマは、当時の揺れ動く世界や日本の現状を考慮し、「現代文化の葛藤と人間の未来—エスニシティ、都市、環境の視点から」とした。与えられた時間が 3 時間なので、総括討論に 1 時間を割り当てると、講師の話は 2 時間となり、3 人が限度である。2 人は外部の講師に依頼しても、1 人は当該学科で出そうということになり、ジェンダーバランスも考慮し阿部珠理氏に登壇願うことになった。

阿部氏は、テーマを当日の副題に掲げられた二分野を架橋するかたちで「環境とエスニシティ—先住民族の知恵に学ぶ」とされたので、おかげで残りの分野のエスニシティと都市の外部への依頼が随分楽になったことを覚えている。その後、エスニシティの分野では、文化を広く国際的視野からみている平野健一郎氏（当時、早稲田大学政経学部教授）に「国際文化から見た文化の将来—グローバル化のなか

で文化の多様性をどう守るか」というテーマで、都市に関しては、町村敬志氏（一橋大学社会学部教授）に「都市とエスニティー姿を現す新しい文化のかたち」と題し講演いただいた。

聴講者としては、現代文化学科の新1年生はもとより、一般の市民、院生、高校生や高校の教員なども想定し、ディスカッションし易いようにパネリストも設けることにした。その任は、現代文化学科専任教員の高木恒一氏と田房由起子氏が引き受けてくれた。

新1年生にシンポジウムの感想を課したこともあり、当日は現代文化学科の学生はもとより、社会学部の専任教員、さらに社会学部の教員OB、院生や助手の人々の協力もあり、5号館5322教室がほぼ満員になる盛況であった。のちに知ったことだが、当日のシンポジウムの会場となったこの5322教室は、立教大学社会学部の都市研究を世間に広く知らせることになった、現立教大学名誉教授奥田道太氏の「豊島区の外国人」や「新宿区の外国人」調査の講義や調査法がもたれた教室とのことであった。大変、由緒ある教室でシンポジウムはもたれたことになる。

2時から5時までのシンポジウムは、登壇者の熱のこもった話や討論により、終了時間が延長された。その後、会場を太刀川記念館に変え、新設学科記念祝賀パーティが開かれた。ここには、当日のシンポジストはもとより、社会学部の教職員、学科新設の仕事に関わった社会学部以外の事務の方々も含め多数に参加いただいた。

残念だったのは、現代文化学科が設置されたときの総長であった大橋英五現立教大学名誉教授に参加しただけなかったことである。そもそも現代文化学科の設置が可能になったのは、経済学部から定員100人の枠をお譲りいただいたことだとは、立教大学に赴任したときから聞いていた。その最大の功労者に礼を失してはならないと思い、直に研究室を訪問し招待状をお届けしたが、他の仕事の関係で実現できなかった。

シンポジウムの時間を延長しながら、場所を変えても予定通り6時から祝賀会に切り替えられたのは、シンポジウムの会場に拘束された現代文化学科のそれ以外の教員が、時間を見計らって会場を後にし、太刀川記念館で下準備を行ってくれていたからである。

祝賀会には、わざわざ金一封を持参された事務の方や高校の先生方もおり、恐縮するなり、あまり経験のないことだけに戸惑ったことも思い出される。

その後、会も終わりに近づき、学科を代表して私が挨拶をすることになったが、大略次のようなことを述べた。ここにあって再現をお許し願うのは、この気持ちは今も変わっていないからである。

「みなさん、本日はお忙しいなかをかくも大勢の方々にシンポジウムとパーティに参加していただき、現代文化学科の誕生を一緒にお祝いしていただき心から御礼申し上げます。

先ほどのシンポジウムでは、あらためて文化に関する研究の緊急性、重要性を感じることができましたし、また、このパーティでもわれわれ現代文化学科のメンバーに対していかに多くの方々が期待されているかを身にしみて感じることもできました。現代文化学科を代表しまして、心から御礼申し上げます。

私は、この1週間のあいだに、自己点検の報告書作成のためにあらためて現代文化学科の創設目的や意図に関する申請書を通読する機会を得ました。以前読んだことはあったのですが、今回、あらためて読んでみて、1つの学科を作るにはいかに多くの人々のエネルギーと熱意を必要とするかをあらためて垣間見る思いがしました。と、同時に創設の中心になって腐心された人々の熱い思い、期待も実感として伝わってまいりました。

われわれ現代文化学科の多くのメンバーは、直接にこの産みの苦しみを経験しておりません。この産みの苦しみを他人に任せた者のせめてもの恩返しは、立教大学といえば社会学部、社会学部といえば立教大

学といわれるように、すでに歴史と実績を積んでいる他の2学科と切磋琢磨できるような存在に現代文化学科を大きく育てあげることだと思っております。

先ほど白石学部長の挨拶にもありましたように、現代文化学科は本年度入試に1800余人の志願者を集めることができました。しかしこれは、われわれ現代文化学科のメンバーの努力というよりは、既存の社会学部2学科に籍を置く創設に関わった人々の先見の明と努力の賜です。これから年を追うごとにわれわれの実力が試されていくわけですが、初年度が最高だったなどといわれないうように頑張っていかなければならないと思っております。

本日を機に、現代文化学科のメンバー一同、決意を新たにしておりますので、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。今年もあと1か月余りという、大変お忙しい時期に最後まで残って励ましの言葉をかけていただきました皆さんに心からのお礼と感謝の言葉を申し上げまして、ご挨拶に代えさせていただきます」。

現代文化学科ができるには、準備段階時の社会学部長だった門奈直樹教授（現立教大学名誉教授）、社会学部新設学科設立委員会委員長であり開設時の学部長であった白石典義教授（現立教大学経営学部国際経営学科、兼副総長）、白石新設学科設立委員会委員長のあとを引き継いだ宮島喬教授（現お茶の水女子大学名誉教授）、当時の総長補佐だった笠原清志教授（現経営学部経営学科）など、多くの社会学部教員の時間を惜しまぬ熟議・奮闘の結果と思う。当時の白熱の議論が目に浮かぶ。以前から社会学部の教員だった間々田孝夫教授（現社会学部長）や阿部珠理教授（現代文化学科）を除いて、現代文化学科の多くの教員は、私をはじめその渦中に身を置いていない。

こうした先人たちの労苦に報いるには、現代文化学科をさらに充実・発展させる以外にない。このときの私の気持ちと現代文化学科への期待は、定年後の今も変わらない。

### 3、今後への期待

社会はどんどん変化していく。その変化の波も加速度的に速くなりつつある。社会学部のなかに、第3の学科としてようやく大学全体でも認知されつつあった現代文化学科も、2年目が過ぎる頃からいつまでも新米気分では済まされない状況になりつつあった。なんと社会学部のなかで社会学科と肩を並べて歴史のある産業関係学科が、経営学部として独立する構想が練られていたのである。

教授会で産業関係学科独立後の代替りの第3の学科が議論されることになり、その結果、創設されたのが現在のメディア社会学科である。現代文化学科は、創設4年そこそこで先輩学科になってしまった。「できたばかりですから」と、いつまでも甘えは許されなくなったのである。

立教大学全体をみても、いたるところで学部や学科の新設、改編、改革が進められている。時代の流れが、知の枠組の固定化を許さなくなっているのだろう。現代文化学科も創設の頃は、学内に「文化」を冠する学科はなかった。しかし、いまは同じ学内に、06年の文学部の改編に伴い同学部史学科に「超域文化専修」ができ、同年新座キャンパスの観光学部にも、交流文化学科が設置された。さらに08年には、学部として「異文化コミュニケーション学部」も新設されている。社会学部内の現代文化学科は、学内の他学部からも挑戦を受けているといえる。

もちろん経験科学としての社会学が問題にする文化やコミュニケーション研究と、例えば言語を基礎とする異文化なりコミュニケーション研究は、理念も方法も異なるが、保護者や高校生にそこまで知って受験する人も少ないだろう。むしろ類似の学部や学科が、その差異を自覚しつつ切磋琢磨し、全体として立

教大学への活性化、刺激となることの方が、大学の発展に貢献するだろう。

2012年2月の一般入試で現代文化学科は、74人の募集人員のところに1341人の志願者があった。昨年  
は1162人であり、どの大学も受験生獲得が難しくなりつつある昨今、これだけの志願者を集めているの  
は立派である。実質倍率は、昨年以上になるだろう（昨年は5.7倍）。立教大学全体をみても、実質倍率  
5倍以上の学科はそれほど多いわけではない。大学内に同じく「文化」を冠するライバルをもつ学科とし  
ては、大いなる健闘といえる。これだけの志願者を集めることができたのは、大学の不断の努力もさること  
ながら、現代文化学科設立時の理念なり方向性が輝きを失っていないからでもあろう。新学科創設時に  
身を置いた者としてやはり嬉しく思う。

しかし、東日本大震災後、人々の価値観にも変化がみられ始めている。これまでは、豊かな消費を楽し  
むためにたとえ1人でも生活の質をエンジョイしたのに、東日本大震災後は、あらためて人と人のつな  
がりの重要性が再認識されている。独身貴族を楽しむより、貧しくともつながりを求めて結婚する若者も  
増えている。

「現実には緑で理論は灰色」といわれる通り、次々に新しい緑は生えてくる。21世紀を象徴するようなエ  
スニシティ、文化、宗教、都市、環境、消費というキーワードに始まった現代文化学科が、新しい緑にど  
のように対応し、創立期より時代をリードし社会の変化に敏感だった社会学部の柔軟性に貢献しつつ、大  
学全体の発展にいかにか寄与していくか、惜しめない声援を送りつつ、これからもみつめていきたい。

最後に、現役時代、何の貢献もできなかった私に、このような場を与えてくれた社会学部教授会の方々、  
現代文化学科の以前の同僚諸氏、現代文化学科開設10周年記念号編集担当の三浦雅弘氏並びに事務の方  
々に心からお礼を申し述べたい。

2012年3月

元立教大学社会学部現代文化学科長  
東京女子大学名誉教授

佐久間 孝正